

第2特集

ここまでわかった！ 気象と体調不良

気象と健康に関連があることは古くから示唆されてきたが、近年は気候変動に注目が集まり、「気象病」や「天気痛」などの用語が一般の方にも認識が広まっている。患者側のロジックとして、「気圧が低いから頭が痛い」といったことは診察室で語られる機会が多いと思うが、医師としては気象と疾患との関連について、医学的な論拠をつかめておらず、扱いに困っている方も多いと思われる。そこで、この病態をどのように捉え対処していけばよいかを、さまざまな臨床的な視点からみることを目的として、本特集を企画した。今回、取り上げた疾患は、頭痛、耳疾患、脳血管疾患、小児疾患である。いずれの疾患も気象病を呈する場合が少なくない。

気象病の実態はいまだ明らかになっていない点も多いが、メカニズムの重要な点は「気象に対する身体の生物学的、心理学的感受性が変化すること」だと考えている。気象病のメカニズム研究を目的として、編者らは「臨床気象病研究会」を立ち上げて、活動を行っている。今回の特集はこの研究会グループのメンバーにお手伝いいただいた。本特集が読者の日々の臨床に大いに役立つことを願っている。

編集幹事

愛知医科大学病院 疼痛緩和外科・いたみセンター／
竹橋クリニック

佐藤 純